

安礼の崎の所在3説

さて、冒頭で紹介した安礼の崎の所在地をめぐっては、今までに次の3説が唱えられてきました。

■西浦半島説

歌人の土屋文明が『続万葉紀行』で唱えた説。安礼の崎は、伊勢から三河の国府付近の海岸に至る間の海上に求めるべきであるとし、「漕ぎ廻み行きし」という歌柄にふさわしい地形として、蒲郡市西浦町の御前崎を挙げた。御前崎は西浦半島の先端。眼下には三河湾が広がる景勝地で、この歌の印象からも納得のいく説です。西浦半島を船上の万葉人が交通の目印にしたことに間違いはないでしょう。この説は長く蒲郡の人々によって信じられ、西浦半島の東側山麓には「万葉の小径」として遊歩道が整備され、安礼の崎の歌碑も立てられています。



西浦半島に立てられている安礼の崎の歌碑

■御津町御馬説

久松潜一が「引馬野、安礼乃崎考」で唱えた、御津町御馬の音羽川河口に所在地を求める説。河口からは、遠く左手に渥美半島、右手奥には知多半島、そして手前に西浦半島や蒲郡の沖に浮かぶ島々などが眺められます。現在、この岬は消失してしまっていますが、江戸時代初期の絵図にその存在を裏付ける岬が描かれていることや、三河国の国府にも近いことから、この御津町御馬説は有力とされています。

■遠江説

安礼の崎を三河国以外に求めるものとして、浜名湖の今切口の西、静岡県浜名郡新居町の出鼻説があります。持統天皇の行幸がこの地にも及んだことを前提とする説ですが、当時の交通の状況や、地勢上からは可能性は乏しいとされています。

安礼の崎をめぐるロマン

今から、約千3百年も前に詠まれた歌であるため、安礼の崎の所在地を特定することは難しいとされています。しかし、黒人が三河湾に臨む地に立ちこの歌を詠んだことは事実であり、旅情豊かなこの歌をめぐる多くの人々がその所在地に思いを馳せてきたことはロマンに溢れています。三河湾の美しさは古代から今に至るまで変わりません。これからも、それぞれの人がそれぞれの思いで「安礼の崎」を感じ、大切にしていこうとが重要なのでしょうか。

【参考文献】

『東海の万葉歌』(おうふう刊)

現代短歌

フェスティバル in 蒲郡

三河湾に臨む蒲郡市は、中世を代表する歌人である藤原俊成卿が国司を務めた地でもあります。

歌の伝統が息づく蒲郡に第一線の歌人が集結し、熱く楽しく語り合います。

また、竹島に祖父・佐佐木信綱の歌が碑となって残る佐佐木幸綱氏の講演も行われます。

とき

6月27日(土) 午後1時～5時

ところ

市民会館 大ホール

参加費

市内在住の方のみ無料

(その他は2千円)

内容

・講演「短歌の不思議」

講師 佐佐木幸綱(歌人)

・シンポジウム1部・2部

パネリスト 高野公彦、島田修三、栗木京子ほか

申込・問合せ先

生涯学習課 ☎66◆1167

※市内在住を証明するもの(運転免許証など)を持って、直接生涯学習課へ。(火曜定休。午前8時30分～午後5時)